【別紙様式Ⅰ】 令和5年度　学校評価報告書

学校名　玉川小　　学校

校長名　山口行子

厚木市教育委員会の基本目標	1　自ら学び、鍛え、未来を拓き、夢や可能性に挑み続ける力の育成 【挑戦】 2　自他の命や豊かな感性を大切にし、多様性を認めながら共に生きていく力の育成 【共生】 3　変化する社会に自ら進んで関わり、人々と協働してより良い社会を創る力の育成 【創造】

学校教育目標	学校経営の方針
豊かな人間性とたくましく生きる力をもった児童の育成	本校の伝統と児童・地域の実態を踏まえ、社会の変化に対応して充実した未来を築くことをめざして、豊かな心をもち自己の目標に向かって努力したくましく生きる力をもった児童を育てる。そのために、全教職員と保護者・地域が信頼と和を深め、一人一人の個性と創意を生かして協働し学校教育目標の具現化を図る。

今年度の重点目標

【ひびきあう心】自他を尊重し合い、活動の主体性を高める取組の推進
【ひびきあう学び】 主体的で対話的で深い学びのための指導の工夫
【ひびきあうこだま】人や自然とのかかわりを大切にする活動の推進

評価項目・指標等	基本目標との関連	具体的な取組	成果と課題	次年度への具体的な改善策
【ひびきあう心】 自他を尊重し合い、活動の主体性を高める取組の推進	2・3	〇居心地の良いクラスづくり ・児童アンケートの結果などを活用した学級経営の展開 ・あいさつや望ましい言葉遣いによるよりよい人間関係づくり ・年間を通した人権感覚を養う活動の推進 ・互いの良さや多様性を認め、支え合う力の育成 〇個に応じた支援の充実 ・児童アンケートや児童教育相談を基にした共感的児童理解の推進 ・教育相談コーディネーターや児童指導担当を中心とした児童理解と支援の充実 ・SCや元気アップアシスタント、関係機関との連携 ・困り感・学びにくさを抱えた子どもたちへの適切な指導・支援 〇児童の主体性を育む活動の推進 ・活動の目的意識の明確化 ・自主的・実践的な態度を育てる学級活動・児童会活動の工夫、充実 ・縦割り活動、異学年交流の推進 ・『あいさつはこだまする』明るいあいさつが響く学校づくり	〇各学期のいじめアンケートや生活アンケートの結果をもとに担任と児童の教育相談を行い、児童の実態や学級の課題を把握し、支援や指導に生かすことができた。 ●アンケート結果をクラス担任だけでなく、学年間などで共通理解できるとよかった。 〇児童指導担当や教育相談コーディネーターを中心に児童理解の充実を図ることができた。毎週水曜に児童指導支援会議を設け、全職員で共通した児童指導を行うことができた。 〇トラブルの際、担任を中心に児童に寄り添った聞き取りを丁寧に行い、児童指導、CO等が連携して適切に対処してきた。 〇SCは各クラスに入って給食や休み時間を一緒に過ごし、学校全体の児童の様子をよく見ることができたため、専門的な助言を児童指導や児童支援に生かすことができた。 〇保護者アンケートの評価で「お子さんに気になることがあった時、学校に相談しやすい雰囲気がありますか」の達成率が昨年より0．2上がった。 〇委員会活動、クラブ活動では、児童数の減少に伴い次年度に向けて組織編制の見直しを行った。委員会数やクラブ数が減る中でも、児童の思いに沿った活動が展開できるよう検討した。 〇今年度は、異学年交流がよく進んでいた。縦割り清掃や縦割り遊びだけでなく、ペア学年で一緒に学習したり、遊んだりする取組があった。児童アンケートの「違う学年の子と話したり仲良くしたりしている」と「友達に優しくしたり、協力している」のポイントが大幅に上がった。 〇「あいさつ」については、進んで挨拶をすることを意識できる児童が増えている。今年度は、保護者アンケートも0．3上がった。	→アンケート結果を担任だけにとどめず、他学年、級外とも共有していく。学校職員全体で全児童をみていくことを共通認識していく。 →体育等で内容の重なる単元は、合同で行うなど、異学年交流をさらに積極的に行う。 →「あいさつはこだまする」玉川小学校を目指した取組を継続する。

【　ひびきあう学び　】 主体的で対話的で深い学びのための指導の工夫	1	○わかる授業・楽しい授業 ・児童が学ぶ目的を認識し、学んだことの意義を実感できるような学習活動の充実 ・友達の考えを聞いたり、自分の考えを表現したりして学びを深める指導の工夫 ・校内研究・研修の充実 ・学び方を学ぶ学校図書館教育の推進 ・一人一台のタブレットPC（手段）を活用した指導の工夫 ○基礎学力の定着 ・TTや少人数指導等の充実 ・授業やモジュールタイムでのタブレットPC等を積極的に活用した読み・書き・計算の学習内容の定着 ○家庭学習の習慣化 ・家庭との連携の強化 ・音読、宿題、自主学習の習慣化・個別最適化	○校内研の授業で他学年の授業参観から学ぶことが多かった。 ●支援級での校内研究の課題の設定の仕方や適切な支援の仕方を考えていきたい。 ○児童同士の学び合いを意識して授業を展開させることを目指して授業づくりができた。 ○授業でchromebookを活用したり、デジタル教科書を活用したりし、支援的な面や評価等でも効果的に指導に生かすことができた。 ●必要な学習支援の方法として適切にICT機器を利用できるように教材研究をしっかりと行っていきたい。 ○モジュールタイム、授業等で継続的に読み書き計算の学習を進めることができた。 ○異学年対抗の計算プリントができて、児童のやる気があがった。 ○家庭学習充実週間を中心に児童の家庭学習の習慣を充実させるように努めることができた。学期に一回、家庭学習を見直す良い機会となった。 ○家庭の協力もあり、家庭学習の習慣が身に付いた。	→chromebookの適切な利用について教職員で学び合い、児童が主体的に活動したり、学びを深めたりするために利用させたい。 →校内研究において、国語で自分の考えを伝えたり、書いたりすることができる子が増え、他の教科にもよい影響が出てきている。小規模校に合った研究をさらに進めていく。 →単元のはじめにゴールを児童と共有したり、学び方を指導したりして、児童が主体的に学べるようにしていく。 →モジュールタイムや授業での異学年での学習交流を行っていく。 →学力差があるなか、個に応じた学習支援をしていく。 →自分から家庭学習を行えない子を今後も個別にも指導していく。 →学年の発達段階や個に応じて自主学習ノートやタブレットPCを利用させて自分に合った家庭学習を進めさせるにように指導していく。
【　ひびきあうこだま　】 人や自然とのかかわりを大切にする活動の推進	1・3	○豊かな自然を生かした活動の展開 ・年間を通した農業体験活動の推進 ・児童の主体性を育む農業体験、自然体験活動の工夫 ○人との関わりを生かした活動の推進 ・外部指導協力者との目的意識の共有 ・地域住民と児童が学び合う活動の工夫・改善 ・地域との交流を生かした活動の推進 ○安全教育の推進 ・登下校指導や子どもの危機意識を高める工夫（日々の指導） ・防災教育の推進 ・安心安全な学校環境づくりの推進 ○特色ある教育と情報発信（小規模特認校） ・保護者、地域との連携を深める学校、学年、各種たよりの充実 ・保護者、地域との連携を深める学校ホームページの工夫	○感染予防に留意して（距離をとるなど）、コロナ前に近い形で農業体験活動を行うことができた。今年度も収穫した作物は、家庭で調理・試食等や6年生の感謝の会で調理することで、収穫の喜びを共有することができた。 ○児童の主体性を育む授業づくりを行い、それを地域の方々にサポートして頂く形で活動を進めることができた。また、新たな見学先（お店探検）や講師の方にご協力してもらい、学びを深めることができた。 ●さらに活動を充実させたり、精選したりしていきたい。 ○感染予防に留意して（距離をとるなど）避難訓練や下校指導を行い、児童の安全意識を高めることができた。新たな取組で負傷者対応を含めた避難訓練を行うことができた。また毎週の一斉下校を行い、担当と高学年からの安全に関する一言から子ども目線での安全意識も高めることができた。 ●歩道の歩き方など交通ルールを繰り返し指導はしているが、まだ完全には定着していない。継続指導が必要である。 ●自転車用ヘルメットを着用せずに自転車を運転している児童が数名いる。（全体としてはほぼ着用している。） ●児童や職員の防犯や災害等に対する危機感を今後も上げていく。 【特色ある教育と情報発信（小規模特認校）】 ○ホームページは、こまめな更新を心がけている。保護者アンケートからも児童の学校生活の様子について関心をもっていただいていることがわかった。新しいホームページに変更し、更新しやすくなったので全職員で活発な更新を進めていきたい。	→その年の児童の実態や今後の児童数に合わせたものを見極めて計画、実行するようにしていく →交通ルールについて全職員共通理解のもと、帰りの会などで引き続き繰り返しの指導を徹底していく。 →毎月「安全の日」に着用状況の点検を行い、懇談会などで「自転車用ヘルメット着用は保護者の義務」として、保護者に協力を求めるとともに、児童に声かけを引き続きしていく。 →今年度行った負傷者対応を含めた避難訓練等、防災訓練の工夫をしていく。職員も慣れずに危機感をもって想定外の場合も考えるように職員研修などを取り入れていくようにする。消防の方などからも意見を頂けるような場を設けていく。

今年度の学校関係者評価委員会からの意見

子ども会加入率が上がっている。青健連とタッグを組んでいるので保護者負担は少なくて済むが、保護者間の結束が薄くなることを懸念している。環境整備作業への参加を地域の回覧板で呼びかけることによって参加者が増え、地域の方が学校に入るチャンスとなるとよい。子ども教室で、高学年児童が低学年児童へ「手伝いをしていいですか。」とはっきりと自分の考えを述べたうえで行動に移す、という点に成長を感じた。登下校中で児童のみの時の災害時については、子どもたちの中にいかに防災意識を芽生えさせ、育てていくのか、大人の役割として家庭でも学校でも考えていきたい。5、6年への本読みボランティアで感じること、素直で良い。低学年から読み聞かせをしているが、高学年になっても反応がよく、とても成長を感じる。特に6年の児童は素直で人懐っこい。どこに出しても引けをとらない。異学年交流をしていると聞き、他校でもよい報告を聞いているので良い変化があるのではないかと思う。素通りしていた子が頭を下げるようになった。おはなし会でもよく挨拶ができている。玉川図書館に来る子もよく声を掛けてきて、以前よりよくなっている。一人一台のタブレット端末は将来的に必要なこと。学校にいけない子もオンラインで授業が受けられる。自分の思いを表現できる子どもが増えてきた。2年生の町探検によって子どもだけでなく地域自体も活性化できた。防災に関する探検も今後できるとよい。今年度3．4年生が地元の消防団についての学びができたことは良かった。地域からたくさん学びができるなど少人数での良さ、地域のつながりを深めることができた。その反面大規模校に比べて学力面での心配、競争心への心配がある。玉川の良さを生かしつつ、他校など他への交流で刺激も取り入れていくとよい。

今年度の学校経営のまとめ ・ 次年度への改善の方針
地域との連携・交流は、新型コロナウイルス感染症が令和5年5月から5類になり、より良い方向を探りながら、各学年の活動を少しずつ再開している。地域の方々や外部団体の協力をたくさんいただきながら温かい交流と共に学びの保証をすることができた。今後も、学校をよりよくしようという当事者意識をもち、チームとして目標を合意形成しながら、課題を解決していく調整力をもって、玉小らしい取組を進めていきたい。